

初等・中等教育における映像制作を通じた 教育実践の実態に関する調査

長谷海平*1

*1 関西大学

Survey on the actual state of educational practices in primary and secondary school education through video production

HASE Kaihei *1,

*1 Kansai University

At present, it can be said that there is a certain number of educational practices in Japan that use video production. However, the actual number of such practices is still unknown, and it can't be said that surveys and research on the experiences of video production and education before entering higher education have been actively conducted. In this study, I surveyed university students in the Kansai region about their actual situation.

キーワード: 動画制作, 教育実践,

1. はじめに

教育機関で動画制作を通じた教育実践は数多く行われてきている。その事例は、財団法人国際文化交流推進協会⁽¹⁾による調査報告書や水越⁽²⁾による著作などによって知ることができる。また、特定の教科における実践については、例えば美術科教育の分野では下口ら⁽³⁾の報告などが挙げられる。このように事例報告が多数見られることから、動画制作を通じた教育実践は少なからず実践されてきていることは明らかである。それぞれの報告では動画制作を通じた教育実践の有用性が主張されており、いわゆるリテラシーの獲得や異文化理解、語学学習、アクティブラーニングなど教育実践の手法としての価値が述べられている。

また、動画制作を通じた教育実践は日本では1960年代ごろから、アメリカでは1930年代から取り組まれてきていることが長谷⁽⁴⁾の研究によって示されており、一定の歴史が存在している。

2. 研究の背景

高等教育の場では、動画制作を通じた教育実践が行

われている。例えば、波多野⁽⁵⁾の行った調査報告が示すように、芸術・美術系統の学部や社会学系統の学部など様々な領域でその実践が取り組まれてきた。これらの動画制作を通じた教育の実践について、その内容を設計するためには学生の知識や動画制作に関する教育経験や前提知識を把握しておくことが望ましい。しかしながら、大学生が入学以前にどれほど動画制作に関する経験や教育体験を得ているかに関する調査は積極的に行われている状況にはない。

そこで本調査では大学生を対象に教育体験を含めた動画制作の経験についてアンケートを行い、現代における18歳前後の動画制作に関する経験、教育的体験についてその傾向の把握に取り組んだ。

3. 調査方法

アンケートは2020年4月21日～5月31日の期間に記名・オンライン形式にて実施した。対象は関西の大学に所属する学部生、1～4年生を対象に行い、472名から有効回答を得ることができた。設問は表1の通りである。

表 1

No.	設問	「Yes」 回答数
1	携帯電話・スマートフォン・ゲーム機器のカメラを見たことがある、使って動画を撮影したことがある	293 人
2	携帯電話・スマートフォン・ゲーム機器のカメラを使って撮影、その動画・音声素材を加工したことがある	251 人
3	動画収録機能に特化したビデオカメラ等で撮影したことがある	172 人
4	動画収録機能に特化したビデオカメラなど、使って撮影し、その動画・音声素材を加工したことがある	145 人
5	動画作品を制作し、オンラインにアップロードして YouTube など動画配信サイトを通じて他人の目に触れさせたことがある	74 人
6	360 度撮影カメラを用いて収録したことがある。	12 人
7	360 度撮影カメラを用いて作品を制作し公開したことがある	0 人
8	大学入学以前に学校の授業で動画制作をしたことがある	28 人
9	大学入学以前に学校の課外活動(部活・委員会など)で映像制作を行っていたことがある	27 人
10	大学入学以前に博物館など学校外で実施された体験(ワークショップ・夏休み映画スクールなど)に参加して動画を制作したことがある	3 人

4. 調査結果

4.1 動画制作経験

No.1 の回答より、約 62% の学生がスマートフォンなど身近にある機器の付帯機能を用いて動画の収録を行なった経験のあることが示された。また、No.2 の回答より動画を収録した経験のあるものの約 85% はその動画を素材として何らかの加工経験があることも明らかになった。No.3 の回答では回答者数全体の 36%

に相当する学生には撮影専用の機器いわゆるビデオカメラを用いた動画の収録経験があり、そのうちの約 84% がその動画を素材として何らかの加工をしている。つまり、動画の収録を行う学生の意識として、収録とその加工は一連の作業として認識されていることが示されている。

撮影・加工した動画に対して、オンラインを通じて公開を行ったことがある者は 74 名であり、No.1 および 3 の回答数と比較していずれも半数を超えていない。このことから、動画の収録等を行う目的がオンラインにおける公開が中心ではないことが示されている。

その他、360 度撮影できるカメラを用いた撮影経験は 2% であり、その公開経験が 0% である。このことから同じ動画収録機器というカテゴリーではあるが、先進機器を積極的に活用していく傾向は強くない。

4.2 大学以前の教育経験

No.10 の回答から初等・中等教育で動画制作を通じた教育を受けた経験のある学生は 6% となった。また、課外活動での経験も同程度である。このことから、現代では高等教育以前の段階で動画制作を通じた教育の取り組みはそれほど盛んではないことが窺える。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 18K02819 の助成を受けたものです。

参 考 文 献

- (1) 財団法人国際文化交流推進協会: 『諸外国及びわが国における『映画教育』に関する調査 中間報告書』, (2005)
- (2) 水越伸: 『メディア・リテラシーワークショップ: 情報社会を学ぶ・遊ぶ・表現する』, 東京大学出版会 (2009)
- (3) 下口美帆, 長谷海平: “雑誌『教育美術』に見る映像メディア表現教育: 映像制作を用いた実践の概観とその意義”, こども教育研究, 第 1 巻, 第 1 号, pp.93-103 (2014)
- (4) 長谷海平: “アメリカにおける動画制作を通じた教育実践の始まりに関する調査”, Screen Literacy, 第 1 巻, 第 1 号, pp.93-103 (2020)
- (5) 波多野哲朗: “映像教育実態調査報告”, 映像学, Vol.48, pp.2-45 (1993)